



当時の土浦海軍航空隊(予科練)敷地の平面図(陸上自衛隊提供)

霞ヶ浦(その9) ～土浦海軍航空隊(予科練)～

土浦海軍航空隊は、1930(昭和5)年から海軍飛行予科練習生教育を行っていた横須海軍航空隊飛行予科練習部を、1939(昭和14)年3月1日に霞ヶ浦海軍航空隊に移管した後、阿見村青宿の霞ヶ浦海軍航空隊水上班の跡地(現陸上自衛隊武器学校)に移転させ、1940(昭和15)年に独立、開隊したものです。アジア太平洋戦争の開戦とともに、全国各地に後発の予科練航空隊が多数誕生しましたが、そのルーツとなった航空隊でした。

海軍飛行予科練習生(略称「予科練」)

1922(大正11)年に設立された霞ヶ浦海軍航空隊は日本海軍の航空教育の中核として、士官や下士官に対する操縦教育を行ってきました。しかし、それでもなお人材が不足したため、操縦技術を早くから習得させ、熟達した操縦要員の養成を図る必要が生じてきました。そこで、1929(昭和4)年12月、海軍省令により「予科練習生」(1936年からは「飛行予科練習生」)の制度が設けられました。「将来、航空特務士官たるべき素地を与ふるを主眼」とし、応募資格は高等小学校2年修業程度以上(旧制中学2年終了以上)の学力を有し、満14歳以上20歳未満の者で、教育期間は2年半から3年(のちに2年に短縮)でした。卒業後は「飛行練習生」となり、横須賀、霞ヶ浦海軍航空隊の練習航空隊で、中間練習機を使用しての基礎的飛行訓練を約9ヶ月受けました。この飛行練習生教程は、搭乗員としての基礎的な知識及び技能を習得するもので、この教程を終了後、全国各地に所在する各種実用機の訓練を行う練習航空隊で戦闘機、爆撃機、攻撃機、偵察機等の実用機による教育を約6ヶ月受けた後、部隊に配属され、一人前の飛行機乗りとして成長していきました。そして、1930(昭和5)年6月1日に神奈川県横須賀(追浜)に「横須賀海軍航空隊予科練習部」が発足し、全国からの志願者5807名から79名が合格し、第一期生として横須賀海軍航空隊予科練習部へ入隊しました(後の乙飛)。第二期生は128名で以後航空戦力の増強にともない入隊者数は増加していきます。1937(昭和12)年に日中戦争が始まると、

年間100〜200名であった入隊者数を約400名とし、さらに1941(昭和16)年、アジア太平洋戦争が始まると入隊者は大幅に増員されました。12期生400名、13期生以降は、各期3万人以上の大量採用となり、1945(昭和20)年8月の終戦までに入隊者は約24万人となりました(うち約2万4千人が飛行練習生課程を経て戦地に赴きました。なかには特別攻撃隊として出撃した者も多く、戦死者は8割の約1万9千人にのぼりました)。そのため予科練航空隊は全国各地に新設され、土浦海軍航空隊の他に三重海軍航空隊・岩国海軍航空隊・鹿児島海軍航空隊など、最終的には19か所に設置されています。

1930(昭和5)年、ロンドン海軍軍縮条約で、日本は補助艦の保有量が制限されたため、海軍は制限を受けない航空戦力の増強を図っていきました。1931(昭和6)年に満州事変、1932(昭和7)年には上海事変が勃発し、1933(昭和8)年、日本は国際連盟を脱退、1934(昭和9)年にはワシントン軍縮条約を破棄しました。1937(昭和12)年には日中戦争が始まり、96式戦闘機、96式陸上攻撃機などの航空機も投入され、予科練生の第一期から第三期生までが初めて実戦に参加しています。

この日中戦争の勃発により、搭乗員の急速な増員が必要となり、1937(昭和12)年9月1日に「甲種飛行予科練習生(甲飛)」制度が誕生しました。これは、旧制中学校4年1学期修了程度(のち緩和)の学力を有する者(年齢は満15歳以上20歳未満)を採用し、3年間であった基礎教育を1年2ヶ月〜6ヶ月(の

ちに1年に短縮)で終了させ、飛行練習生教程に進めるものでした(第一期甲種飛行予科練習生は、約3,000名の志願者の中から250名が採用されました)。そして、従来の「飛行予科練習生」は、第8期生から「乙種飛行予科練習生(乙飛)」と改められました。

これにより海軍航空隊の下士官以下の搭乗員養成コースは、一般公募の甲飛と乙飛、及び海軍の下士官兵から選抜された操縦練習生(昭和16年からは丙種飛行予科練習生「丙飛」に変更)の3本立てとなりました(飛行練習生教程は甲飛、乙飛、丙飛とも共通でした)。その他、海軍の搭乗員養成コースとしては「飛行学生」(士官パイロットを養成するコース、海軍兵学校出身の兵科将校が対象、のちに機関科将校からも採用されるようになった)、「飛行予備学生」(大学学部卒業で26歳未満、大学予科または専門学校卒業で24歳未満の者に対し搭乗員としての教育を行い、予備少尉に任用する制度で、大戦末期には大量の学徒が動員された)がありました。



横須賀市にある、予科練誕生の碑

土浦海軍航空隊の誕生

日中戦争の長期化と対米英戦を意識した軍拡にともない、横須賀海軍航空隊に設置されていた海軍飛行予科練習部を1939年（昭和14）年3月1日に霞ヶ浦海軍航空隊に移管し、同年3月31日、阿見村の霞ヶ浦海軍航空隊水上班の跡地を拡張して、「霞ヶ浦海軍航空隊飛行予科練習部」が新設されました。1940（昭和15）年11月15日、飛行予科練習部は霞ヶ浦海軍航空隊から独立し、阿見村における2番目の航空隊である「土浦海軍航空隊」が誕生しました。こうして「予科練」の教育は土浦海軍航空隊で行われるようになり、全国に土浦の名が知られるようになりました。



現在の武器学校内に残る当時の面影を残す士官宿舎

予科練の選抜

昭和初期、多くの少年たちが「大空を鳥のように自由に飛び回りたい」との夢を抱いていました。そのため予科練の競争率は極めて高く、体力はもちろん学力も極めて優秀でなければ合格できません

んでした。予科練志願者は受験願書を市町村役場に提出し、試験に臨みました。選抜試験は1次試験と2次試験があり、1次試験は体格検査と学力試験で、1次試験に合格した者には、身体検査、適性検査、口頭試問などの2次試験が行われました。

1次試験（学力試験）

1939（昭和14）年3月5日発行の「進修42号」には、5年生が「甲種飛行予科練習生を語る」と題して予科練紹介記事を書いていますが、次のような自分自身の受験体験に基づいての試験に対する受験アドバイスも記されています。

一、体格検査

まず体格検査は視力から始まるが何と言ってもパイロットを養成する所だけあって極めて厳重である。陸士や海兵の比ではない。・・・（中略）・・・兎に角体格検査は、「頑張りズム」で行く事が必要だ。

二、学科（学力）試験

海軍兵学校、海軍機関学校と同様に「振り落とし式」である。

第1日 代数、国漢、作文。

第2日 幾何、化学、国史。

第3日 物理、英語、地理。

第4日 口頭試問。

右のような日程で行われ、問題の程度は何れも中学4年1学期修了である。

さて「甲種飛行予科練習生」の試験を突破するには第1数学、第2物理・化学という所である。数学は容易な問題ばかりだから（とは言うものの昨年自分は数学で勿ねられたんだが？）完全な答案を書くことが絶対必要である。代数5問、幾何5問であるが、数学10問中、8問

以上出来れば合格する。物理は他と比較すると実に難問ばかりである。今年4問中計算問題2題、光に関する作図1題、熱のグラフ1題で教科書の解説のみ覚えていった私は危うく3日目まで振り落とされる所だった。次に配点を予想してみる。9課目合計700点満点である（これは確かだ）。その中代数、幾何、物理、国漢、英語は何れも100点。残り4課目は各々50点宛らしいが、700点中、420点（6割）出来れば、合格確実だ。まあ、実力白紙の者でない限り学科は合格する。

三、口頭試問

3日間の学科試験がすむと4日目は口頭試問である。まず地方徴募官（県庁の人）の所で簡単な試問があり、後海軍の徴募官の前へ行くのである。以下内容控室に待っていると「29番」と呼び出したので返事して試問室に入り、徴募官の前へ行って敬礼をする。

「受験番号は」、「本籍地は何処か」、「志願の動機は」、この時ちよつとまごついて「あご」をなでてしまったのだ。今考えると私はこれが源で口頭試問に刎ねられたのである。ああうらめしき口頭試問よ！

「趣味は」柔道、弓道、鉄棒・・・あらゆる運動を皆言ってやったのだ。すると「柔道は何段か」困った2段3段なら好いけれど初段すら取ってないんで。

「若し君が一人で漢口の上空へ偵察に行ったとすると、そこに敵機が20台も30台もやって来たらどうする。連絡に帰るかね」このような試問は攻撃精神をしらべるのだからそのつもりで答え

れば好いのだ。私はその位聞かれた。

土浦中学では従来、軍関係の学校では、海軍三校（海軍兵学校・海軍機関学校・海軍経理学校）や陸軍士官学校への進学希望者がほとんどでした。しかし、1930（昭和5）年から予科練の募集が始まり、1934（昭和9）年には陸軍の少年飛行兵の募集も始まると、その志願者も出てきて、このような記事も見られるようになりました。しかし、受験体験記の「こうすれば絶対合格する」という言い方は、昔も今も変わらないようです。

2次試験

1次試験合格者には、各鎮守府が指定する海軍航空隊等で、2次試験（身体検査、適性検査、口頭試問等）が行われました。身体検査は視力は1.2以上など一般の海軍志願兵よりも厳しいものでした。適性検査は平衡感覚など航空兵として必要な適性を検査するもので、知覚能力、運動神経、判断力等が審査されました。2次試験を突破した合格者は土浦海軍航空隊（初期は横須賀海軍航空隊）に入隊しました。しかし、入隊式までの間に、身体検査や適性検査、口頭試問が行われ、不合格者は帰郷させられました。このように厳しい選抜試験に合格した者が海軍軍人である飛行予科練習生（4等航空兵）となりました。

※選抜試験の方法や教育期間は、時期によって変更されています。

※予科練生を教育する航空隊を「予科練」と呼ぶこともあります。

参考

「阿見と予科練」そして人々のものがたり「阿見町